

## 楽曲解説

### 1. 歌劇『魔笛』 序曲 (モーツァルト)

作曲者のモーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart) は、1756年1月27日、ザルツブルクで生まれた、オーストリアの作曲家、ピアニストである (没: 1791年12月5日)。

本日演奏する『魔笛』は、モーツァルトが作曲した21曲の歌劇のうち、最後に完成させたものである。

特徴は、当時の主流のもの (イタリア語によるレチタティーヴォ付き) とは異なり、ドイツ語によるセリフ付きの作品で、分類上は **Singspiel** (ジングシュピール: 歌芝居) である。

ストーリーを簡単に言うと、日本の狩衣を身に着けた王子 (タミーノ) が、お調子者のパパゲーノと共に、神官 (ザラストロ) に連れ去られ捕らわれの身となっているパミーナ (夜の女王の娘) を助けに行き、めでたく結ばれるという物語である。

しかしながら、内容は意外と複雑で、「誘拐された女性を救出し、悪を倒すぞ!」というヒーロー物の展開で物語は進むが、タミーノが神聖なる殿堂に入ると徐々に様子が変わり、実は「夜の女王こそが悪で、ザラストロは全能の神の使いである」ということとなり、ザラストロが用意した「沈黙」、「火」及び「水」の3つの試練を乗り越えて“愛と徳 (**Lieb und Tugend**)” を手にした二人 (タミーノとパミーナ) は結ばれる、というものである。

これらの試練を突破するのに助けとなったのが、タミーノの吹く「魔笛」である。日本語で「魔笛」と書くと「悪魔が来たりて笛を吹く」のように思えるが、実のところは **Die Zauberflöte**、つまり「魔法の笛」なのである。

一方、このオペラは、一般大衆が楽しめる要素も散りばめられている。それが、パパゲーノの持つ銀の鈴 (**Silber Glöckchen**) で、これを鳴らすと、迫りくる悪者が急に踊りだしたり、みすばらしい老婆が可愛いパパゲーナに変身して沢山の子供に恵まれるなど、おとぎ話的要素となっている。

このオペラのアリアには数々の名曲がある。1つのオペラでこれだけたくさんのアリアや重唱が単独でコンサートで取り上げられる作品も珍しい。それだけ、モーツァルトの最晩年の渾身の作品なのであろう。そんなアリアの代表的なものは、なんといっても「夜の女王 (ソプラノ) のアリア」で、このアリアには、お化け屋敷で「キャーッ!」と叫ぶよりも高い音程が要求されている。続く「ザラストロ (バス) のアリア」では、絞っても出ないような低音が要求されている。一方「パパゲーノ (バリトン) のアリア」は対照的に楽天的だが、ちょっぴり「おセンチ」な部分もあり、その親しみやすさから、数々の器楽のために編曲されたり、ベートーヴェンなどがこのアリアを主題として変奏曲を書いたりしている。

序曲はというと、「3つの和音」で始まる。この「3つ」というのが、オペラ全体を支配している。夜の女王に仕える侍女は3人であるし、タミーノたちを導く子供も3人組である。また、台本を書いたシカネーダー (**Emanuel Schikaneder**) が初演時に配役を務めたパパゲーノのアリアはすべて3番 (スリーコーラス) までである。さらに、タミーノがトライ

した試練も3つである。

序曲に使われているフレーズが劇中で使われるのは、この「3つの和音」のみで、ワーグナーの前奏曲やヨハン・シュトラウスの喜歌劇の序曲のような、劇中のメロディーをダイジェストで聞かせる構成とはなっていない。

とはいえ、この序曲は、「これぞ、魔笛！」と認知されるほど、和声、旋律が秀逸である上に、幕が上がる前のワクワク感を盛り上げるような曲想となっている。

## 2. ハイドンの主題による変奏曲 変ロ長調 作品56a (ブラームス)

作曲者のブラームス (Johannes Brahms) は、1833年5月7日にハンブルクで生まれた、ドイツの作曲家、ピアニスト、指揮者である (没：1897年4月3日)。

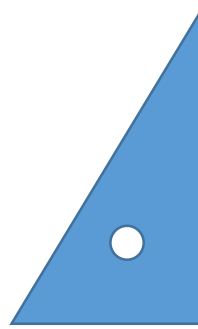
幼少期からピアノの才能を発揮し、作曲も行った。

1853年、20歳のとき、ドイツのデュッセルドルフ (Düsseldorf) に、シューマン (Robert Schumann : 1810~1856) の元を訪ねた。そして、その優れた才能を認められ、作曲家として歩む道が開かれた。しかし、その3年後、シューマンがライン川へ投身自殺を図り死去すると、ブラームスはデュッセルドルフに移住し、残された家族の面倒を見つづけ、未亡人となったクララ (Clara Schumann : 1819~1896) とは、お互いに恋愛感情が芽生えたとか……

そんなブラームスといえば、ふっさふさの白いひげをたくわえ、横から見ると直角三角定規を立てたような風貌で知られるが、当時は、シュッとしたイケメンだったのである。



見慣れた風貌



青い三角定規



シュッとしていた頃

その後、1862年からはウィーンに居住地を移し、作曲に専念するようになった。『ドイツ・レクイエム』が高い評価を得て、作曲家としての地位を確立すると、『アルト・ラプソディー』、有名な『ハンガリー舞曲第5番』などを完成・出版させた後、本日演奏する『ハイドンの主題による変奏曲』を作曲した。

この曲は、主題、8つの変奏曲及び終曲で構成されているが、その主題となった旋律は、ハイドン (Franz Joseph Haydn : 1732~1809) が作曲した『野外のためのディベルタイメント (作品番号 Hob II 4 6)』の第2楽章「聖アントニウスのコラール」の主題である。このテーマは、すでに存在する聖歌の旋律を基にしていると言われることから、「純粹には、ハイドンの作曲ではない！」などと異論を唱える専門家が『聖アントニウスのコラールによる変奏曲』という別名を与えている。

なお、この曲は、管弦楽版より先に、2台ピアノ版 (作品56b) が作曲されている。

**主題** *Andante* 変ロ長調 4分の2拍子

主題は、先述した通り「聖アントニウスのコラール」となっている。一般には、4小節で1フレーズを形成するのが耳に心地良いのであるが、このコラールは、5小節で1フレーズとなっており、より印象的である。

**第1変奏** *Poco più animato* 変ロ長調 4分の2拍子

ファゴット、ホルン、ティンパニのリズムに乗せて、弦楽器がテーマを奏でる。テーマの前半が4分音符、後半が3連符と、メロディに変化をつけている。

**第2変奏** *Più vivace* 変ロ短調 4分の2拍子

一転、劇的な短調による変奏である。テーマは、断定的な第1小節目の後は弱音による細かい動きとなっている。

**第3変奏** *Con moto* 変ロ長調 4分の2拍子

再び穏やかな曲想に戻る。高原で深呼吸をするようなイメージである。

**第4変奏** *Andante con moto* 変ロ短調 8分の3拍子

再び短調となるが、こちらは悲劇的要素を強く感じる。曲はここで、初めて3拍子となる。一つひとつの音を噛みしめる印象である。

**第5変奏** *Vivace* 変ロ長調 8分の6拍子

一転、テンポの速い曲想になる。交響曲でいえば「第3楽章 スケルツォ」的な要素に思える。

第6変奏 **Vivace** 変ロ長調 4分の2拍子

イメージは、宮殿！前半のファンファーレ的なテーマに導かれるように、後半になって王様が登場し、そして、皆で踊り出す・・・筆者の個人的な感想である。

第7変奏 **Grazioso** 変ロ長調 8分の6拍子

フルートとヴィオラによる、シチリアーノ風の何とも心地良い優雅な旋律である。

第8変奏 **Presto non troppo** 変ロ短調 4分の3拍子

テンポの速さもさることながら、細かいフレーズを弱音で美しく表現しなくてはいけないという、演奏上、この曲最大の難所である。

終曲 **Andante** 変ロ長調 2分の2拍子

チェロとコントラバスが奏でる5小節のモチーフが何度も繰り返され、それに旋律を変化させて重ねるといったパッサカリア形式となっており、スケールの大きな楽章である。コーダの部分は、弦楽器を中心として、変ロ長調の音階を16分音符、6連符、8分音符と変化（拡大）させ、しかも、だんだん弱くしてゆき、「機関車が停まるように終結」するものと思わせておいてから、一気に華やかに締めくくっている。

### 3. 交響曲第1番 変ロ長調《春》作品38（シューマン）

作曲者のシューマン（Robert Alexander Schumann）は、1810年6月8日にドイツ東部、ライプツィヒ（Leipzig）やドレスデン（Dresden）からほど遠くないツヴィッカウ（Zwickau）で生まれた、ドイツの作曲家である（没：1856年7月29日）。

当初は、ピアニストを目指したが、指の故障により夢をあきらめて作曲に専念する一方、音楽評論家としても活動した。この間にピアノを師事したヴィーク（Friedrich Wieck）の娘が、のちに妻となるクララ（Clara Josephine Wieck：1819～1896）である。

さて、シューマンの作曲活動は、初期は、「トロイメライ」で有名な『子供の情景』などピアノ曲のみの創作であったが、クララとの恋愛により歌曲への関心が生まれた。そして、クララと結婚した1840年には、『詩人の恋』、『リーダークライス』、『ミルテの花』といった連作歌曲集など、この年だけで100曲以上の歌曲を作曲した。そのため、シューマンにとっての1840年は「歌曲の年」とも呼ばれている。

しかし、翌年になると一転して2曲の交響曲を書いた。そのため、1841年は「交響曲の年」と呼ばれている。そのうちの1曲が本日演奏する交響曲の初稿版『春の交響曲（Frühlingssinfonie）』である。ちなみに、他方の交響曲はニ短調で、出版がかなり遅れたことから「第4番」として認知されているものである。

さて、その『春の交響曲』であるが、初演時には各楽章に副題が付いていた。

第1楽章 春のはじまり (Frühlingsbeginn)

第2楽章 宵 (Abend)

第3楽章 うれしい戯れ (Frohe Gespielen)

第4楽章 春爛漫 (Voller Frühling)

クララの父親からの壮絶な反対を押し切って、やっと結婚できたシューマンの、まさに「春うらら」の交響曲なのである。その後、メンデルスゾーン (Felix Mendelssohn : 1809 ~1847) のアドヴァイスにより、冒頭のモチーフの音程を変更するなどして、「交響曲第1番『春』」として出版された。

第1楽章 Allegro molto vivace 変ロ長調 4分の2拍子

「春」を表現するファンファーレで曲が始まる。

続く序奏 (Andante un poco maestoso、4分の4拍子) は、冬から春への景色の変化を表現している。(※あくまで筆者の個人的な感想であり・・・) まず、冬の暗い景色を描写する。フルートのカデンツァによってだんだん日差しが暖かくなることを表現し、その後の弦楽器の3連符で雪解けを模写すると、テンポをだんだん速く(雪解けが加速)して、春の訪れとともに提示部に入る。

第1主題は、冒頭の「春のファンファーレ」を速く(専門的には縮小)しており、春の訪れとその喜びを表現している。木管楽器で奏でられる第2主題のモチーフは、春風のような優しいメロディーとなっている。

第2楽章 Larghetto 変ホ長調 8分の3拍子

流麗なメロディーが主体の第2楽章である。さながら、おぼろ月を眺めながら、暖かくなってきた夕暮れのひとつときを楽しんでいる様子だろうか。

トロンボーンとファゴットによる第3楽章の主題の暗示のあと、切れ目なく、第3楽章に移行する。

第3楽章 Scherzo Molto vivace ニ短調 4分の3拍子

主部、第1トリオ、主部、第2トリオ、主部、終結部で構成されている、2つのトリオを持つ楽章である。

主部のテーマは、前半が男性的、後半が女性的となっている。

トリオはいずれも、その男性と女性が舞踏を楽しんでいるイメージであり、終結部は、その嬉しい戯れを回想しているようだ。

第4楽章 Allegro animato e grazioso 変ロ長調 2分の2拍子

冒頭から喜びがあふれる情景である。春の明るい日差しと、咲きほこる花に、心が躍動する、そのような印象の楽章である。

宮沢賢治は、彼の代表的な著作『セロ弾きのゴーシュ』において、三毛猫がやって来てリクエストする「トロイメライ」の、その作曲者のことを、「ロマンチック・シューマン」と称している。まさに、シューマンの音楽はどれも、詩的で幻想的なのである。

以 上